

伝統芸能

はな 花 鼓 つづみ

八右衛門は友達思いか？

衛門をこく一般的な悪人と設

国立小劇場で二十四日まで

定しており、むしろ微笑まし

公演中の、近松門左衛門作

くさえある。しかし、近松の

「冥途の飛脚」で「淡路町の

描く本来の八右衛門は、本人

段」を語っている。忠兵衛と

できえ気づかない複雑な嫉妬

いえば、色男だが気の弱いタ

心を持った、巧妙な悪人のよ

メ男。その忠兵衛を救うた

うな気がするのだ。

め、憎まれ役を買ってやる八

忠兵衛は大坂淡路町の飛脚

右衛門は、実は友達思いの度

屋の養子で、田舎出ながらよ

量の広い男。一般的にそう解

く働き、教養もあり、男前。

積されることが多いが、は

ナンバーワン遊女の梅川とも

て、ホンマかいな？

相思相愛にまで発展する。忠

歌舞伎の「封印切」は近松

兵衛の仕事仲間の八右衛門に

の没後にできた改作で、八右

はおもしろいわげがない。

文楽太夫 豊竹英大夫



八右衛門は嫉妬深い男？

だが、忠兵衛もまた、梅川への第三者からの身請け話で深刻な事態に陥ってしまった。

阻止する金力はなく、心中を決意する一人。折も折、八右衛門の仕事の金が忠兵衛の店に届き、身請けの手付金に流用してしまうのだ。忠兵衛、すでに狂気の沙汰である。

注目すべきは、この時点で五十兩の封印が「切られていた」ことだ。これは当時の死罪にあたる。金の請求に来て事情を知った八右衛門は、忠兵衛に同情しホロリ涙を流し、二七の小判包みを暗黙の了解で受け取る。

ところが、彼はその二七包みを大勢が集まる茶屋へ持って行き、「獄門の種御覽あれ」と高らかに忠兵衛の罪を告発するのだ。そんな八右衛門を語るに、制御できない嫉妬の塊が伝わってくる。

死に突き進む忠兵衛の常軌を逸した心理を語れば、魂が翔んでいくようだ。語るからだが、その両方から快感を覚える。

豊竹英大夫
撮影・秦晴夫